

エウリピデスの語法 (1)

逸身喜一郎

βάκχαι, βακχεύω

エウリピデスは「パッコスに憑かれた女」「パッコスに憑かれる」といった類の語を、しばしば狂気の比喩として用いている。人が狂気に襲われる様を描くことはこの詩人の好むところであって、いくつもの劇に狂気がでてくるが、そういった「狂乱の場」を比較してみると語彙の点でも顕著な類型化がみられる。ここでとりあげるパッコス関係の言葉も、そういった決まり文句の一つに数えられる⁽¹⁾。

もちろんパッコス関係の語の使用は「狂乱の場」に限らないし、比喩の対象も、必ずしも狂人・狂気だけではない。しかしエウリピデスが狂気からめてこの語の使用にこだわっていることは、最晩年の劇『バツカイ』が集団狂気を題材にしていることから明白であろう。

「パッコスに憑かれる」といえば、なんらかの形で狂気に襲われた状態を指したことそれ自体は容易に理解される。しかし「目玉が焦点を失いぐるぐる回る」といった表現とはちがって、「パッコス憑き」の場合、今日のわれわれには具体性に欠けており、いまひとつ明瞭な意味が伝わらない。例えば LSJ は *ἀναβακχεύω* に *to rouse to Bacchic frenzy* の訳語を当てているが、具体的にどうすることを想定したらよいのだろうか。それを劇『バツカイ』に、特にその解釈に余りにも依存せずに、むしろできるかぎり当該箇所およびそれに似た箇所の文脈から把握するように努めてみたい。けれど劇『バツカイ』の上演以前に、「パッコスに憑かれた女のように」というだけで観客にはなんらかの了解があったからである。逆にパッコス関係の字の常識を周辺から固めることで劇『バツカイ』に見当違いの読み方を導入するおそれも少なくなろう、という期待もできるのである。

しかしながらそもそも「パッコスに憑かれる」という私の訳語、憑依と

いう字を持ち出すこと自体、不適切という考え方もあろう。*βακχεύω* は本来「*βάκχαι* のようにふるまう」の意でしかない。しかし、「バッコスを崇拜する者(主として女)が、崇拜の儀式に関与することで忘我の状態に陥り、常人には出来ないことをする、その際その人物をもバッコス・バッキー(バッコスの女性形)と呼ぶ」⁽²⁾という説明を受入れれば、憑依といっているのではないか。

動詞 *βακχεύω* には、前綴り *ἀνα*, *ἐκ*, *συν* の付いた複合形もあるが、意味の基本部分は同じであるから、以下の記述においては別項を立てて取り扱わない。むしろ注目すべきは自動詞・他動詞の別であろう。エウリピデスはいくつかの箇所、本来自動詞でしかなかったはずのこの動詞に目的語をとらせている。通常その意味は「(目的語たる)人を *βάκχαι* にする」であると考えられている。いいかえれば「何かが人を *βακχεύω* させる」、つまり使役動詞になっているというのである。しかし全部が全部そうではない。いくつかの箇所ではこの他動詞は、むしろ「(目的語ではなく主語自身が) *βάκχαι* となって何かに襲いかかる」を意味しているのではなからうか、と思われる。これについては後で具体例を検討しつつ考える。

なおこのあと言葉の説明を日本語で行うとき、バッコスに憑かれたようになる人物が単数であろうと複数であろうと、また女であろうと男であろうと、すべて便宜的に「バッキイ」と表記する。従って「バッコス」は、神ディオニューロスしか指さない。

バッキイは山中をただならぬ速さで疾走する。「狂ったように走る」といってもいいだろう。この点を比喻として用いているのが『ヒッポリュトス』550行 (*δρομάδα ναῖδ' ὄπως τε βάκχαν*)、『ヘレネー』543行 (*ὡς δρομαία*

πῶλος ἢ βᾶκχη) である。

『トロイアの女』のカッサンドラーも、単に「狂っている」だけではない。341行以下では、その疾走ぶりが強調される。(「…パッカイとなった乙女が足を軽やかにあげるのをやめさせるべく捕まえないのか」。このセリフの直前で彼女はおのれの死を意味する結婚を讃えて松明を持って乱舞しているが(308-340行)、その歌と踊りの激しさを要約してでてくる言い方がパッカイなのである。もっとも『トロイアの女』170行、『ヘカペー』121行のカッサンドラーについては特に足の速さには言及されていないし、『ヘカペー』676行 *βακχείου κάρα* (直訳すれば「パッコスのような頭」)は「狂った頭」と読むべきである。

『イオーン』1204行では、毒の入った酒を飲んだ鳩が「体をふるわせ(もしくは、盲滅法な飛び方をして)パッカイとなり(*δέμας ἔσεισε κἀβάκχευσε*)、異様な鳴き方をする。」ここでも *βακχέω* に与えられている意味は、常軌を逸した動きである。

『フェニキアの女』21行「ライオスは快楽に身をゆだね、*βακχεία* におちて(*ἐς βακχείαν πεσών*)、子種をイオカステーにまいた。」

ピアソンは、ここの *βακχεία* は「酒に酔って」の意味ととる(当然この場合、酒に酔って、を快楽云々に先行する動作として訳さねばならない)⁽³⁾。しかしここでエウリピデスが言おうとしたのは酩酊ではなくむしろ「我を忘れて」「見境をなくして」「正気を失って」ではないだろうか。『パッカイ』のみならず、後期の劇でエウリピデスがパッコス関係の語を用いるとき、まず大抵の場合、「パッコスにとり憑かれた女」の比喻であり、それは判断力を失った状態を指す、というのが第一の理由であり、第二には特に限定をつけずに *ἐς βακχείαν πεσών*⁽⁴⁾ というだけで、酩酊にまで意味が特定

されるのか、という疑問である。なるほど『キュクロプス』では酒がバッコス関係の語を使って指示されるが、この劇では神バッコスとぶどう酒との深いつながりは自明であり、しかも酒がはっきりと物で示されている。また『フェニキアの女』21行と似たような状況を語る『イオーン』553行では *βακχίου πρὸς ἡδοναίς* (「バッコスの快楽にかられて」) が確かに「酔って(あるいは、酒の勢いで)」の意味をもっているが、しかしその直前にはっきりと「しらふでか、それとも酒に酔って (*κάρονον*) か」と明言されているから、*βακχίου* が酒酔いの意味であることに誤解の余地がない。しかるに『フェニキアの女』21行では、*βακχία* のほかには、その前後に何一つ、酒をも酩酊をも指示する語が出て来ないのである。それともエウリピデスは「酒を飲み過ぎて判断力をなくした状態」の、結果のみならず原因までがこの一語で指せる、と考えたのか。

もっとも「酩酊説」を退けるためには、伝アポロドーロス『ギリシャ神話』が障害となる⁽⁵⁾。そこにははっきりと疑いの余地なく「ライオスは酒に酔って (*οἴνωθείς*) 妻と交わった」と書いてある。ただアポロドーロスは、エウリピデスのこの箇所を読み間違えた、と想定できなくもない、と思うがどうだろうか。この間についてはここまでとする。

バッカイは獣の子に跳びかかって、その肉を裂く (*σπαραγμός*)。この異様な行動は、バッカイの特徴の一つであって、だからこそ『オレステース』1492以下では、ヘルミオネーに襲いかかるオレステースとピュラデースが、「山中の獣の子に走りよって捕まえる、バッコスの杖持たぬ、バッカイ (*ἄθυρσοι...δραμόν τε βάκχαι*)」のようであると表現されるのである。

『ヘーラクレス』の主人公は、狂って、自分の妻子を殺す。彼がバッカイに比較される時、単に狂ったというだけではなく、あきらかに

σπαραγμός も意図されている（後述，他動詞966行参照）。1119行で，彼は「ハーデースのバックカイ（*Ἁϊδοῦ βάκχος*）」と言われるが，これはまた『ヘカペー』1077行で，我が子を殺され自分も目をくりぬかれたポリュメストールが，加害者のヘカペーたちを指している言葉でもある。後者の場合，加害者である女たちは復讐の念に燃え上がっているが，今日の意味で狂っているわけではない。

しかし『ヘーラクレス』においては事情はもっと複雑である。ヘーラクレスを狂わせたのはリュッサ，すなわち狂気そのものであるが，このリュッサも家の中を *βακχεύω* している（897行）。リュッサ自身が狂っているか狂っていないかは，描象概念の擬人化一般につきまとう問題であってどちらでもいいが，それが *βακχεύω* するという言い方で思い浮べるべきことは，リュッサが家の中を跳梁跋扈して，狂気をあたり一面に振りまいている姿ではなからうか。もしそうであるなら，ここ『ヘーラクレス』887行では，*βακχεύω* に目的語がついてはいなくても，その実質の意味「(人)を狂わせる」によって，使役動詞に近づいていることとなる。とすれば狂気→襲撃は，二段構えになっている。狂気がヘーラクレスに襲いかかった結果，ヘーラクレスが狂って妻子に襲いかかる。その際，ヘーラクレスをそうさせるのも *βακχεύω* ならヘーラクレスがそうするのも *βακχεύω* である。

おまけに実際にこの家でおこる惨劇は，エリーニュス (*Ἠριένυστος*) が踊る「タンバリンもなく，バッコスの杖もない」踊りであると描写され，十行ほどにわたってエリーニュスがバックカイになぞらえられる（887-898行）。エリーニュスには形容詞 *λυσσαῖδες* 「気を狂わせる」（あるいは「気が狂った」）が付いている。エリーニュスがバックカイになるというのも，その速い動き

を描写するとともに (*δρομάδες*)、人を狂気に陥れさいなむことと関係づけられよう。

同じく『オレステース』319行で、オレステースをさいなんでいるエリーニユスは、「バツカイならざるバツカイの集まり」(*ἀβάκχευτον θίασον*)を持っている⁽⁶⁾。この箇所でもエリーニユスに *δρομάδες* 「足が速い」という形容詞が付いている。

先述したようにエウリピデスは *βακχέω* を他動詞 (使役動詞) としても用いた。自動詞を使役動詞にまで意味を拡張する例としては、他に *χορεύω* (「踊る」→「踊らせる」)がある。*χορεύω* が他動詞となっている例には、『ヘーラクレス』871行でリュッサのいう「おまえを踊らせる」(*σε χορεύω*)とか、『オレステース』582行「エリーニユスを使って私を踊らせる」(*με... ἀνέχορευ' Ἐρινύσσω*)のように、踊りが狂気に動かされる様の比喩として使われているものがある。これらは本項と内容的にも関係してくるのだが、ここではこれ以上扱わない。参照するにとどめる。

他動詞の場合、何が何を狂わせるのか明示されるので、エウリピデスが好んだ *βακχέω* の比喩的用法の精髓がみてとれる。以下一例ずつ吟味する。

○『ヘーラクレス』966「ひょっとするとリュコスを殺したこと (*φόνος νεκρῶν*) が、おまえヘーラクレス (*σε*) を狂気に陥れたのか」

ここで、*ἐβάκχευσεν* に託されている意味内容は、狂ったヘーラクレスの見せた肉体の異変の描写が先行こそしているけれど、むしろ我が子を敵の子と妄想し襲いかかって殺し始めた行動を指している。その襲撃の異様さと迅速さ、さらには尋常ならざる力の発揮までが読み取れよう。つまり

「獣を襲いその肉を引き裂くこと (σπαραγμός)」との連関がもっとも強い。「誰かを殺したために狂気におちいる」とはさんざん悪人退治(=人殺し)をしてきているヘーラクレスに対する言い分としては、内容的にあまり適切とは言えないが、言葉の上ではあとでみるような類例がある。

○『ヘーラクレス』1142 ἦ γὰρ συνήραξ' οἶκον †η βάκχευο' ἐμόντ;

ウィリンクはこれも他動詞の例にあげているが⁽⁷⁾、どうテキストを修正するにせよ、οἶκονは συνήραξα(うちこわす)だけの目的語である、と考えられる。他動詞の例としては不適切である。

○『ヘーラクレス』1086 ...ἀν' αὐ βακχέουσι Καδμείων πόλιν

テキスト修正は韻律上必要であって、ἀναβακχέουσι そのものに疑いの余地はない。その目的語カドモスの町すなわちテーバイの取り方であるが、ポンドは一つの可能性として『ヘーラクレス』966 (σε) 『オレステース』338 (σε) を参照しつつ infect' all Thebes with madness の訳を呈示してみる⁽⁸⁾。たしかに『ヘーラクレス』966行、『オレステース』338行と厳密に対応するように訳せば「ヘーラクレスがテーバイをして狂わしめる」であるが、これはおかしい。話者の恐れているのは狂気の伝染ではない。狂気からひきおこされる暴力がさらにテーバイ全体にむけられることである。

したがってこの目的語の取り方としては、ἀναβακχέουσι が「襲う」の意味を帯びてテーバイが襲撃対象になっているとするか、さもなくば ἀναによって場所を指示しているかのどちらかであろう。後者はポンドの最終的な読み rage throughout the city である。

私はこの他動詞の意味は、「バックイとなって(対格のものに)襲いかかる」であるとする。すでに、ヴィラモーヴィッツの意訳 reißt in dem

(8)

tosenden Taumel Ganz Theben dahin.⁽⁹⁾がこの線にそっている。パッカイの代表的行動としての *σπαργμός* が暗黙裡に考えられている例に、上述『ヘーラクレス』966行、さらには『オレステース』1492行があげられる。*ἀνα* が襲う、殺すの意味を持つ点では *ἀναίρω* と比較できる（ただし *αίρω* の場合それ単独でも同じ機能を持つ目的語をとるけれども）。そしてエウリピデスではないが *ἐπιβακχεύω* が rush on like a bacchanal の意味で、喜劇詩人ニコストラロスによって使われている（LSJ 唯一の例）。

○『オレステース』338 *Πορεύων τις ἐς δόμον ἀλαστόρων / ματέρος αἷμα σᾶς, ὃ σ' ἀναβακχεύει;*

δ σ' δς H: δς σ' V²O² L γρ. Σ (di Benedetto の apparatus)

従来読みでは「おまえを今パッカイにしている（＝狂わせている）母親の血を、怨霊（*τις ἀλαστόρων*）が、今、家の中に持込んで（*πορεύων*）、涙に涙を重ねている」となる。確かにこれでは時間関係がすっきりしない。

「母親の血、すなわち母殺しが家の中に持込まれた結果、今、オレステースが狂っている」のなら、筋が通るのだが。

ウィリンクは338行で、*δ* のかわりに *δς* の読みをとる。ここではその理由全体については考えない。ウィリンクの当該箇所を参照するとどめる。この読みに従うと、*δς* の先行詞は *τις ἀλαστόρων* であり、関係文中の動詞 *ἀναβακχεύει* は『オレステース』411行のように *σε* と *ματέρος αἷμα σᾶς* との二重対格をとることになる。当然 *πορεύων* は、何か自動詞にかえなくてはならない。「おまえを母親殺しのことで狂わしめている怨霊が、家の中にやってきて…」のように。二重対格については、『オレステース』411行とあわせてあとで考える。

βακχεύω の受動態に関しては、確実な例が一つあり、さらに中動態かも

しれない例が一つある。

○『バッカイ』1295 *ἐμάνητε, πᾶσά τ' ἐξεβακχέθη πόλις*

能動態に変換すれば、主語はディオニューソス、目的語はテーバイ（の全住人）となろう。この用例の場合、「バッコスにとり憑かれた」というのが最も適当な訳語である。

『オレステース』835 *οἶον ἔργον τελέσας / βεβάκχεται μανίαις, /*
'Ευμνίσι θήραμα, /...

βεβάκχεται は中動態か（「狂気を伴って（*μανίαις* 随伴・様態の与格）、バッカイのように跳ね回っている」）、それとも受動態か（「狂気によってバッカイにさせられている」もしくは「バッカイとなった狂気によって襲われている」）。*βακχέω* およびその複合語が比喻であろうとなかろうと中動態で使われている例は、エウリピデスには『嘆願する女』1001の一例しかない。さらにこの後に続く *'Ευμνίσι θήραμα* は事実上、受動の意味をもつ（「エウメニデスによって追い求められている」）。以上の理由からこの *βεβάκχεται* は受動態とりたいが、そうすると、*μανίαι* が果たして動作主（agent）たりうるか、という問が生じよう。

これに対しては「バッカイとなった狂気によって襲われる」の意味であるとしたうえで、① *Αύσσα*（狂気）が『ヘーラクレス』899で *βακχέω* している（ただし自動詞「バッカイのように駆け回る」）② *μανίαι* はエウメニデスの *cult title*⁽¹⁰⁾である、という理由を上げて説明することもできる。しかし中動態を否定する決定的な理由はない。

中動態であれ受動態であれ、完了形が使われるのは注目に値する。固有名詞から作られた派生語の語幹に疊音を施すというのは、相当に大胆な言葉遣いである。それだけに、エウリピデスにはもはや動詞 *βακχέω* が通

(10)

常の動詞として受け取られた、と言えるかもしれない。

次は二重対格の例である。まずは分かりやすいものから。

○『トロイアの女』408 *εἰ μὴ σ' Ἀπόλλων ἐξεβάκχυσεν φρένας*

σε と *φρένας* の二つの対格は、動作の及ぶ人物と、その人物の身体の部位を表わす(限定の対格)。つまり「おまえの心を狂わせる」というに等しい。*ἐξεβάκχυσεν* は、たとえば「洗う」といった動詞と同じように扱われている。

『オレステース』411 *αὐταὶ σε βακχεύουσι συγγενῆ φόνου.*

συγγενῆ φόνου Σ (*λείπει ἢ διὰ, ἔν' ἢ διὰ τὸν συγγενῆ φόνου*) et *φόνου*
superscr *M*: *συγγενεὶ φόνῳ* codd.

αὐταὶ が指しているのはエリーニユスである。*σε* の機能は『トロイアの女』408行の *σε* に等しい。しかしもう一つの対格 *συγγενῆ φόνου* は *φρένας* に対応しない。よって限定の対格ではない。スコリアは、前置詞 *διὰ* が意味的に落ちている、と説明する。たしかに「肉親を殺したことにより」はすっきり適合するので、その点ではよい。ただ「原因を表わす対格」というのは文法的説明としてうまくない。だからこそ写本本文では *συγγενεὶ φόνῳ* と与格にかえられているのであろう。(しかしこの与格もよく考えてみるとわけのわからない与格である。上で簡単にひいた『オレステース』582 *με... ἀνεχόρου' Ἐρενόσιν* と一見よく似ているが⁽¹¹⁾、この場合エリーニユスは手段の与格である。)

先述したように『オレステース』338行 *τις ἀλαστόρων ματέρος αἶμα σᾶς ὄς σ' ἀνα βακχεύει;* も、同様の二重対格である可能性がある。338行の *σε* は408行の *σε* に、*ματέρος αἶμα σᾶς* は *συγγενῆ φόνου* に対応する。ウィリンクは338を *who torments you with madness as to your*

(11)

mother's blood と訳している。限定の対格というわけである。しかしこんな限定対格はあるだろうか？ 内的対格と取るのも腑に落ちない。かりに *φόνον* が、*βακχέω* の過程で起きるならば、あるいは *βακχέω* の結果起こるものならば内的対格といえようが、この文では血は *βακχέω* の以前にすでに流されているのである。

ところでウィリンクは類似の二重対格の例として『オレステース』423行 *ὡς ταχὺ μετήλθον σ' αἷμα μητέρος θεᾶ* をひく。この *μετήλθον* は、「何かの理由で誰かを追求する」の意味である。KG i327 は、詩の用法として *τιμωρόμαι* が、人と、事件(犯罪理由)の二つの対格をとることを述べたうえ、さらに *μετέρχομαι* をひいている。しかし *βακχέω* はのっていない。

ウィリンクの比較は正しくない。*τιμωρόμαι* にしろ *μετέρχομαι* にしろ、二つの目的語の一方だけしかなくても、つまり人だけでも事件だけでも、十分、文章として成り立つ。ところが、少なくとも「バッカイにする」の意味を残す限り、*βακχέω φόνον*, *βακχέω αἷμα* とは言えないし、そのような例はない。人はバッカイにすることができても、事件を狂わせることはできないからである。

となると、エウリピデスは *βακχέω* という動詞の用法を、先に自動詞から使役動詞にまで拡張したように、ここではさらに意味をひろげ「(犯罪を)きびしく追求して、その結果、(人を)バッカイのようにする(=狂わせてしまう)」とか、あるいは「バッカイのようになって、誰かの犯罪を追求する(=エリーニュスの追求の様がバッカイの襲撃のようである)」を表わしている、としかいうよりなさそうである。エリーニュスそれ自体がバッカイになぞらえられることについては、上述『ヘーラクレス』887-898行と

『オレステース』319行に例がある。さもなくば『オレステース』338行では *αἷμα* を主語に読み、411では中世写本のように与格にするか、*φόνου* を「殺人者」の意味として *σε* と同格にするか、そのあたりにしか解決がない。

以上の他動詞の用法をまとめると次のようになる。『ヘーラクレス』966行、『トロイアの女』408行、『パッカイ』1295行、それに主語を *αἷμα* に読んだときの『オレステース』388行は、「誰か人間を *βάκχαι* にする」の意味であること、間違いない。『ヘーラクレス』1086行はおそらく「*βάκχαι* となって襲う」である。『オレステース』835行は受動態としてとる限り、「*βάκχαι* にさせられた」よりも「*βάκχαι* のようになった狂気(もしくはエリーニユス)に襲われた」のほうが、文派からみてよさそうである。『オレステース』411行と、二重対格としてとった場合の『オレステース』388行は、主語エリーニユスなり怨霊が *βάκχαι* となって襲いかかるとも、それらが「(目的語の)おまえを *βάκχαι* にする」とも、どちらともとれるだろう。

この項の最後にあたり、*βάκχαι*, *βακχεύω* などの単語の面白い用例は、『ヘーラクレス』、『オレステース』、『パッカイ』の三作品に集中していることを指摘しておこう。

蛇足であるがウェルギリウスは『アエネーイス』4巻で *bacchatur per urbem* という表現を二度、301行では「噂」(*Fama*) からアエネーアースが黙って出航する予定であると聞かされ怒り狂うディードーを主語とし、666行ではディードーの自刃を町中に広める「噂」を主語として効果的に使用しているが、この用法の手本はエウリピデスと思える。専門家の御意

見を伺いたい。

τλήμων

悲劇固有の形容詞 *τλήμων* には、「かわいそうな、惨めな」という意味に並行して「ためらうことなく悪をなす、凶々しい」の意味もある。この二つの意味は、「ひどいことをされた」と「ひどいことをする」、すなわち一つの概念の、受動と能動の対立項としてとらえることが可能である。原則として人間を修飾し、物を修飾する例は、本来の用法を転移した比喩的用法としてよい⁽¹²⁾。

ある特定の箇所が「ひどいことをする／された」の、相反する二つの意味のどちらであるかは、文脈から容易に識別できる。正確にいうと、後述する後期エウリピデスの用法までは、区別は明確に意識されていた。

能動／受動、二つの意味は *τλήναι* 「耐える」を語源とすることで、説明がつく⁽¹³⁾。能動の意は「大胆不敵なことをやるにあたり、動じない」、受動のほうは「むごいことをされているにもかかわらずじっと耐えている」が間に入っていると見ればよい。ただこれはあくまで語源学的説明であって、実際に「我慢強い」とか「(良い意味で) 大胆な」の意味の用例があるかどうかは、相当に解釈の問題である。私の見るところ、少なくともエウリピデスに関する限り大部分の箇所では、むしろ「ひどいことをする／された」で考えたほうが実際に即している⁽¹⁴⁾。

アイスキュロス・ソポクレス・初期中期エウリピデスにおいて、*τλήμων* が対立する二つの意味で使えることは、もちろん意識されていた。しかし、能動／受動、二つの意味が混乱することはなかった。ところがエウリピデスは後期の作品で意識的にこの語の両義性を活用する。その最初の確実な

(14)

例。

『ヘレネー』109行 ὦ τλήμων Ἑλένη, διὰ σ' ἀπόλλυται Φρόγες.

「ああτλήμων ヘレネーよ、おまえのせいでトロイア人は滅んだ」

この劇の設定では、ヘレネーはパリスと一緒にトロイアにいったのではなく、エジプトにいた。トロイアに運ばれたのは彼女に似せて作られた像であった。人々はヘレネーのためと思いつつ実際はその像をめぐる戦い死んでいったのであり、ヘレネーに責任はない。しかしヘレネーは、自分が美しくなければトロイア戦争は起こらなかった、と自分を責めている。これがこの劇の根本である。

さて109行は、ヘレネーがテウクロスと話している最中に思わず漏らしてしまう慨嘆である。たまたまエジプトにやって来たテウクロスは、自分の前にいる女性がヘレネーに余りにそっくりなのに驚きつつもヘレネーであるはずがないから別人と見做し、ヘレネーに問われるまま、トロイア戦争の逐一を報告する。その際作者エウリピデスは、ヘレネーのことばの中で、テウクロスに伝わる表面の意味と、真相を知っている観客にだけ分る裏の意味との二つの意味を一つの表現におさめる技法を駆使する。(この「二重性の活用」へのエウリピデスのこだわりについてはもう少し説明が必要であるが、本稿とは別のところで扱う。)

つまりヘレネーであることを隠してテウクロスに伝えている意味は「ひどいことをするヘレネー」であるが、その一方、彼女自身の気持、そしてそれを観客は察知するのであるが、それは「かわいそうなヘレネー」なのである。もっと正確にいうとエウリピデスは観客に、ここ109行ではτλήμωνが二つのレベルで用いられているのを理解することを求めている。

しかし『ヘレネー』109行の例は、τλήμωνの両義性が生かされていると

はいえ、能動／受動二つの意味はセリフの二つの層に対応していて、それぞれの層の上では意味は明白である。しかし *ελθμων* が「ひどいことをする／された」の両方を、同時に同レベルで表わすこともある。ただし「ひどいことをする」と「された」は、対立する概念ではあっても、矛盾ではない。『バックイ』のクライマックス、ペンテウスが母アガウエーに殺された一部始終を物語る「使者の報告」の次の二つの用例、とりわけ後者はその例と言える。

『バックイ』1058 以下、「ためらいを知らないペンテウスには、女の群が見えず、こう言った。『おい、我々のいるところからでは不純な女まで目が届かない。崖の上の、頭をもたげた樅の木に上れば、狂女たちの淫らな行いをしっかり見届けられる。』」

『バックイ』1116 以下、「たとえためらいを知らないアガウエーでも自分を判別して殺しはしないようにと。そして母の頬に手をあてて、嘆願の叫びをあげる。」

こころみに「ためらいを知らない」と訳した *ελθμων* は「かわいそうな」でもよい。観客はこの前の場面までに、ペンテウスもアガウエーもともにディオニューソスによって無残に狂わされていることを知っているし、母が息子を生身のまま手で引き裂くことも予期している。「使者の報告」において言葉は「使者」という一登場人物の意見ではなく客観的な描写として用いられるのが約束事であることも留意されるべきであろう。「恐ろしいことをする」ペンテウスとアガウエーは同時に「恐ろしい目にあわされて」いるのである⁽¹⁵⁾。

似たような例で、伝えるべき意味は「かわいそうな」であっても、「かわいそうになった」その当の理由が「酷いことをした」ため、ということ

がありうる。『ヘーラクレース』1013行以下、「妻子を殺したこのかわいそうな男は、今、不幸な眠りを眠っている」にも、両方の意味が生きている、というべきであろう。

こう考えてみると先にあげた『ヘレネー』109行ももっと複雑かもしれない。ヘレネーは自分が美しかった故にトロイアが滅んだ、と己を責めている。その意味で「加害者意識」をもっている。とすれば、テウクロスむけの意味が「加害者非難」であることには変りがないが、自分および観客むけの意味は単純に「被害者としての自己憐憫」というのではなく同時に「加害者意識」も混ざっていると考えられる。

『オレステース』において、この形容詞は頻出する。「かわいそうなオレステース」という組み合わせだけでも五回(35,74,845,947,1334。どれもあとで述べるように *τλήμων Ὀρέστης* が、行の始めの五音節を占める)、その他オレステースが自分のことを指して「かわいそうな俺」というのが二回あり(293,1028)、「かわいそうなヘレネー」というメネラーオスをうけ「俺はかわいそうではないのか」とオレステースが言う場面すらある(1613)。

τλήμων Ὀρέστης という組み合わせは、実はこの劇にとどまらない。アイスキュロス・ソポクレス・エウリピデス、それぞれオレステースの復讐(即ち母親殺し)を扱った劇に一回ずつ使われている。そこでデニストンは、*τλήμων* は、少なくともオレステースに関しては、ほとんど枕言葉(エピテト)と化している、と言った⁽¹⁶⁾。このデニストンの表現には含みがある。つまりホメロスの枕言葉同様、文脈にそっての意味を失っている、ということである。たしかにエウリピデス『エレクトラー』850行での意味は「かわいそうな」でも「ひどいことをする」でもない。せいぜい「苦勞(我慢)を重ねて来た」という語源の意味を読むのが、もし可能であるなら

いちばん近いだろう。

デニストンを受けてガーヴィーは *τλήμων* 'Ορέστης は「定型句」(formula) のようなものである、と言いつつ切っている⁽¹⁷⁾。つまり使われる行の位置はどれも同じであるし、「オレステース」というのも「かわいそうなオレステース」というのも、要するに意味に相違はない、ということなのであろう。あるいはガーヴィーの考えを進めれば、父の復讐のため母殺しとなるオレステースは、「かわいそうに／ひどいことをする」のだから、*τλήμων* の能動／受動、双方の意味を特定の文脈からは限定されることのない普通の相において担っている、のかもしれない。

しかしおそらくこの説は正しくない。まずアイスキュロス・ソポクレスの用例において、*τλήμων* の意味は明確に「かわいそうな」である。さらに *τλήμων* 'Ορέστης の組み合わせが数多く使われているように見えるが、それはエウリピデスの『オレステース』があるからであって、他の劇ではそれぞれ一回ずつにすぎない。そして詳述は避けるがトリメトロスにおいては、'Ορέστης のように短長長の音節でできている単語は、第三～第五番目の位置しか占めることが出来ないから、おのずとその前には *τλήμων* のような語が来やすいのである。

むしろ問われるべきは、なぜ劇『オレステース』において *τλήμων* が頻出するのか、ということだろう。『オレステース』は奇妙な劇である。劇の開始以前に復讐＝母殺しは終わっている。オレステースは母殺しに苦しむ一方、そのために裁判にもかけられ死刑の判決を受ける。彼は自分を守ってくれないメネラーオスに腹を立て、その妻ヘレネーを殺そうとし（ヘレネーに罪なし、とは言えない）、それに失敗すると娘のヘルミオネーを人質にする。単純化すれば、母殺しはアポローンにやらされたからで自分のせい

ではない、と考える、被害者意識の過剰なオレステースが、死刑にされるのもメネラーオスが援助しないからだ、とさらに被害者意識をつのらせ、再び殺人に走ろうとする(加害者となる)。

こんなオレステースが繰り返しエレクトラー(彼女も弟思いではあるが、あるいはそれゆえにこそ同類である)から「かわいそうなオレステース」といわれ自分からも「かわいそうな俺」といって、いかなる効果があるか。これは一種の「異化効果」だと、私には思える。観客が「かわいそうな」という単語を聞いた時に、その当の語の持つ別な意味を文脈から外れて思い出すよう、エウリピデスは企んだのではないだろうか。

注

- (1) ただし、類型化という言い方は彼の文章を低く評価することではない。すでにあるステレオタイプな言い回しを無反省に繰り返し使用したのではなく、彼が何度も使用することで類型の域に達したかもしれないのだから。
- (2) E. R. Dodds, *Euripides: Bacchae*, Oxford 1962² xii 以下に書かれていることをこのように簡略化できよう。文字通りの引用ではない。
- (3) A. C. Pearson, *Euripides: The Phoenissae*, Cambridge 1909, ad loc.
- (4) ἐς...πεσών という言い回しに、特に「陥る」まで読むことはない。上記(3)に上げられた例参照。
- (5) Ed. R. Wagner, *Apollodori Bibliotheca (Mythographi Graeci vol. 1)*, BT, III 48 (5, 7, 1) (p. 121).
- (6) ἀβάκχευτον は「βακχεύω されていない」であるから、βακχεύω をどう読むかによって、この字の読みも違ってくる。N. Wedd, *Euripides: The Orestes*, Cambridge 1907, ad loc. はエリーニユスには酒をそなえることがないからだ、と説明し(この事実そのものは正しい)、ἀβάκχευτον θίασος を「酒なき酒宴」a wineless revel との訳をつける。私はこれは根本的な誤訳であると思うが、その理由をあげるとなると、「パッカイ」の何たるか、「狂気」の何たるか、から始めなくてはならない。これ一つとってみても、Dodds や Winnington-Ingram の功績は大変なものであつ

た、とあらためて思う。ではなぜ「パッカイならざる」か。C. W. Willink, *Euripides: Orestes*, Oxford 1986, ad loc. は、*θίασος* を coven 「魔女の集会」(!) と訳し、「パッカイならざる」の説明として Dionysiac 'madness' was properly a joyful 'ecstasy' だからという。私には承服しきたい説明であるが、この先は劇『パッカイ』解釈の領域である。

- (7) C. W. Willink, *Euripides: Orestes*, Oxford 1986, ad 338.
- (8) G. W. Bond, *Euripides: Heracles*, Oxford 1981, ad loc.
- (9) U. v. Wilamowitz-Moellendorff, *Euripides: Herakles*, ad loc.
- (10) Willink, ad 37.
- (11) Willink, ad 581-2 は、他動詞として使われ、かつ意味が madden であるという理由で、この二つの箇所を比較するが、比較が有効なのはそこまでである。
- (12) 同根の形容詞 *τάλας*, *τάλαινα* も「かわいそうな」のほかに「ひどいことをする」の意味をもつことがある。
- (13) H. Frisk, *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, *ταλάσσαι*.
- (14) Frisk が並べる「訳語」は、あくまで意味の発展の順を仮想的に追った説明と理解するべきである。「ひどいことをする／される」(能動と受動)と、一番はっきり記したのは、R. Kannicht, *Euripides: Helena*, Heidelberg 1969, ad 109 である (der, der etwas Schlimmes tut / der, der etwas Schlimmes leidet)。
- (15) R. P. Winnington-Ingram (*Euripides and Dionysos*, Cambridge 1948, 136 n.3): の見方は違う。These words are primarily an objective description of a condition of wretchedness, to which may be added an emotion of disgust, of indignation or (commonly) of pity in the mind of the speaker.)
- (16) J. D. Denniston, *Euripides: Electra*, Oxford 1939, ad 850.
- (17) A. F. Garvie, *Aeschylus: Choephoroi*, Oxford 1986, ad 932-4.

本稿は、昭和62年度成城大学特別研究助成の研究成果の一部である。